

アッタカター文献の種類範疇

森 祖 道

パーリ語のアッタカターとは、元來 Pāli (聖典、即ち三藏) という語に対応する文献概念であつて、三藏とは認められない、いわゆる蔵外文献の最初のものを指す⁽¹⁾。今日のアッタカター文献中には、“Pāli ca Aṭṭhakathā ca,” “Pāli vā Aṭṭhakathā vā”あるいはこれと同類の表現が数多く見出されるが⁽²⁾、これらがその証左である。そしてアッタカターとは、言う迄もなく字義通りには註釈書(義疏)を意味し、それも原則的には三藏の直接の註釈書のことである。しかし実際に存在するアッタカターと名のつく文献、あるいは諸文献に記述されているアッタカターの文献概念は、右の様な単なる「三藏の註釈書」という定義では規定しきれないものがある。つまりアッタカター文献には、現実に幾つかの種類範疇があるわけであるが、これは文献成立の歴史的経過や内容等よりして、次の如く三乃至四種類に大別出来るのである。

(一) パーリ三藏の基本的註釈書及び Visuddhimagga
(二) その他の第一次註釈書、

(三) 歴史書及び歴史資料的説話集

(四) その他(टीーカードを有する文献)

以下、右の各々について検討する。

(一) 今日いわゆる Oriental Editions と言われている南方版のアッタカター・シリーズの中で、出版が完結しているのはスリランカ版、ビルマ版、タイ版の三種類であるが⁽³⁾、これらの各版に収められているアッタカター文献には若干の出入りが見られる。その中でこれら三版凡てに共通するものは、Visuddhimagga を始めとして Vinaya の註たる Samantapāsādikā と Paṭimokkha の註たる Kaṅkāvitaranī, Dīgha, Majjhima, Saṃyutta, Aṅgutara の四ニカーヤのそれぞれのマッタカター、Khuddaka Nikāya 一五經 (Khuddakapāṭha, Suttanipāṭa, Dhammapada, Udāna, Itivuttaka, Vināyavāṇa, Petavāṇa, Theragāthā, Therīgāthā, Cariyāpiṭaka, Jāṭaka, Niddesa, Paṭisaṃbhūṭamagga, Apadāna, Buddhavaṃsa) の各アッタカター及び論蔵の七論 (Dhammasaṅgani, Vibhaṅga, Kathāvatthu, Puggalapa-

ñāṭṭi, Dhātukathā, Yamaka, Paṭṭhana) の各アッタカターである。右の註釈書類で三蔵凡てを過不足なくカバーしている。しかしこれらの中で Visuddhimagga だけが三蔵の註釈書でないが、言う迄もなく本書は右のアッタカターの大部分を著作したとされる Buddhaghosa の主著であり、また本書の註釈書 Paramatthamañjūsā は一名 Visuddhimagga Mahāṭīkā とも言われることから考えても（つまり本書はアッタカター・ランカの書）、ここに含めて差しつかえない。とにかくこれらのアッタカターは、右の Buddhaghosa を始めとして彼の同時代乃至は少し後の時代（西紀後五—六世紀）の註釈家である Buddhādatta, Dhammapāla, Upasena (or Upatissa), Mahānāma 等によつて制作されたもの、あるいは伝統的に彼等の作とされて来たものばかりで、いわば最も基本的かつ中心的な初期のアッタカター文献なのである。

(二) 右の如き三蔵註釈書等の外に、アッタカターと呼ばれる種々なる註釈文献が存する。先づ右の南方三版の中では、スリランカ版に Nettipakaraṇaṭṭhakathā, Suttasaṅgahaṭṭhakathā, Catubhāvavāṭṭhakathā (Saratthasamuccaya) の三書が見られ、ビルマ版には Vinayasangahaṭṭhakathā と右の Nettipakaraṇaṭṭhakathā とが見られる。しかしタイ版にはこの種の例外的なアッタカターは収められていない。従つて三蔵註釈書以外のアッタカターで南方三版のいずれかに収められてい

るものは、Visuddhimagga を別として右の四書となる。そこで先づ Netti のアッタカターについてであるが、元来 Netti 自身は伝統説によれば Mahā Kaccāyana (仏弟子) の作とされていたのにもかかわらず、近代的研究の結果では言う迄もなく Milindapañhā, Petakopadesa と共に、今日のパーリ三蔵成立後に制作されたもので、文献史上いわゆる三蔵とアッタカターの中間に位置づけられる蔵外文献である。従つて Netti を三蔵であると前提して、その註釈書をアッタカターと呼んだとすれば、そこに当然問題が生ずる。因みに同類の他の二書の註釈書はそれぞれ、Milinda-ṭīkā (Milindapañhā-vāṇanā), Petakopadesa-ṭīkā と呼ばれ、アッタカターとは呼ばれていない。但しこの Netti-ṭīkā の著者 Dhammapāla は前述の如く Buddhaghosa と同時代人であり、この点より観て本書は確かに前項で挙げた三蔵註釈書に準ずるものと考えられよう。因みに同類の他の二書の内、Milinda-ṭīkā はすつと後代の十三世紀初頭あるいは中葉以降の作とされる。また Udumbara 作の Petakotīkā の制作年代は不詳であるが、Gaṇḍhāvamsa (p. 65, 75) の記述順等よりしても本書が古い時代の作品とは到底考えられなう。

次に Suttasaṅgahaṭṭhakathā についてであるが、合計八六の經典の抄録である Suttasaṅgala 自身がすでに蔵外文献であつて、これは古来スリランカでは具足戒を受けた比丘が最初

の五年間に主として学習するものとされている。⁽⁵⁾これに対する註釈が *Suttasaṅghaṭṭhakaṭṭhā* であるが、その著者 *Arīyavamsa* については年代等の詳細は不明である。また *Catubhāgavāṭṭhakaṭṭhā* とは別名 *Sārattasamuccaya* と⁽⁶⁾言ふ、八—九世紀頃に活躍し論蔵の *Mūlatīka* を著わした *Ānanda Vānaratana* の一弟子の作とされている。即ち SHB 版の本書には “*Ānanda-Vānaratana-sisappaṇitā Sārattasamuccaya nāma Catubhāgavāṭṭhakaṭṭhā*” と表題されている。従つて本書の制作年代も同じ八—九世紀頃と推定可能であろう。因みに *Catubhāgavāṭṭhā* とは五ニカーヤ、特に主として *Khuddakapāṭha* からの抜萃を二七章に纏めたもので、その中には数種の經典と著名な *Paritta* が凡て含まれているが、その作者、年代等は不詳である。次には *Vinayasāṅghaṭṭhakaṭṭhā* についてであるが、これは *Vinayasāṅgha* のフッタカターではなく、*Vinayasāṅgha* というフッタカター・ランタの書という意味である。因みに本書の註釈書は *Vinayasāṅghaṭṭhakaṭṭhā* と呼ばれる (Gv. p. 61, 71) の *Vinayasāṅgha* は律蔵の要約書であつて、本書にはこれ以外に *Vinayavinicchayaśāṅgha* 等、長短数種の別名が使われているが、⁽⁷⁾これを *Vinayasāṅghaṭṭhakaṭṭhā* と呼稱しているのはフルー第六結集版だけの様である。またその著者は *Parakramabāhu* 一世 (一一五三—一五六在位) 時代の高名な註釈家 *Sāriputta* であるから、本書は当

然この時代の制作ということになる。

以上の如き南方三版のいつれかに収録されている四書の外にも、フッタカターと名のつく註釈的文献が若干 *Gandhavaṃsa* 等と見られる。例へば *Caturārakkhā-aṭṭhakaṭṭhā* (Gv. p. 65, 75) 等がそれであり、また一部の經典には後代に新しい註釈 (*navatīhakaṭṭhā*) が作られた。即ち *Dhammacakkasutta-navatīhakaṭṭhā* (Gv. p. 65, 75), *Mahāvesantara-jātaka-navatīhakaṭṭhā* (Gv. p. 65, 75) 等である。また同じ *Gandhavaṃsa* (p. 75) とは *Catubhāgavāṭṭhakaṭṭhā-vivaraṇa* と⁽⁸⁾な一書の名が出ているので、当然かゝつて *Catubhāgavāṭṭhakaṭṭhā* という書も存在したと推察出来るのである。なおこれらの文献はいずれも著者、制作年代等が明らかでない。⁽⁹⁾

(三)以上(二)の文献はいづれも三蔵の註釈書乃至はそれに準ずる様な教理的文献であつたが、三蔵の次に制作された蔵外文献の中には、右の様な種類に入らず、しかもフッタカターと呼ばれる文献が存する。それは或る種の歴史書と歴史資料的説話集である。例へば *Mahāvamsaṭṭhakaṭṭhā* とは *Dīpaṃsaṭṭhakaṭṭhā* (MF. p. 411, 683), *Mahāvamsaṭṭhakaṭṭhā* (MF. p. 207, 362), *Mahābodhiyaṃsaṭṭhakaṭṭhā* (MF. p. 412), *Cetiyaṃsaṭṭhakaṭṭhā* (MF. p. 548), *Mahāceyyavaṃsaṭṭhakaṭṭhā* (MF. p. 509) 等という歴史書の名が挙げられている。これらはいづれも各ヴァンサのフッタカターではなく、ヴァンサというフッタカ

ター・ランクの文献という意味に解されよう。例えば Mahāvamsaṭṭhakathā とは Mahāvamsa という Aṭṭhakathā なのであつて、それだから本書の註釈書 Vamsaṭṭhappakāsinī は Mahāvamsaṭṭhā と呼ばれているのである。但し Kassapa 作の Anāgataṇṇavaṇṇa (Gv. p. 61) には、その註釈書として Uṇṇavaṇṇa 作の Anāgataṇṇavaṇṇaṭṭhakathā (Gv. p. 72) という一書があるので、これらの点については更に検討の必要がある。次に歴史資料的説話集としては、同じく Mt. に Sahaṣsavatṭhupakaraṇa が Sahassavattatṭhupakathā と呼ばれて引用されている⁽⁵⁾。(Mt. p. 451, 452, 607) 因みに本書の底本であつて、更に古い同類の説話文献に Sihavattupakaraṇa が存するが、右の例にならえばこの書も当然 Sihavattatṭhupakathā と呼ばれ得るものと考えられるが、記録上その様な表現は未だ発見出来ない。

四その他、通常のアッタカターという文献概念を全く離れ、従つてアッタカターという表題も持たず、かつ文献中にかつてアッタカターと呼称されたわけでもないけれど、或る観点より考えればアッタカターの範疇に属すると看做され得る一群の文献がある。それは、これらの文献の註釈書がティーカー (復註) と呼ばれているものである。これには内容的に大別して次の四種が挙げられる。

(1) 綱要書——各種の論書等に表示された教理思想を体系的に要

約した、いわゆる綱要書は一般的には勿論、アッタカター文献とは考えない。しかしこれら綱要書の主要なるものに対して、後代ティーカーと名付けられた註釈書が制作されたので、この点から逆に見れば、綱要書もアッタカター・ランクの書といふことになる。この種の綱要書の代表的なものとしては、例えば Buddhadatta 作 Abhidhammāvatāra、同じく Rūpā-rūpavibhāga; Cūḷa-Dhammapāla 作 Saccasankhepa; Kīrti-na 作 Nāmarūpasamāsā (Khemapakaraṇa); Anuruddha 作 Abhidhammatthasaṅgaha、同じく Paramatthavinicchaya、同じく nāmarūpapariccheda 等が挙げられる⁽⁶⁾。右の七書に Kassapa 作 Mohavicchedanī と Chapada 作 Nāmacārāḍipaka の二書を加えた九書が、古来ビルマで重視された九大綱要書であるが、たまたまティーカーが作られなかった二書もこの場合他の七書と同類と考えるべきであらう。

(2) 文法書——バーリの文法学 (vyākaraṇa) 関係の文献は多数存在するが、その中ではつぎりとティーカーと名のつく註釈書を有する文献だけを列挙してみても、ざつと以下の如くである。Moggallāna 作 Abhidhānapadipīkā; Mahāyasa 作 Kaccāyanaśāra; Dharmasenāpati 作 Kārīkā; Kaccāyana 作 Cullaniruti; Vimalabuddhi 作 Nyāsa (Mukhamattadipani); Dharmakitti (or Vacissara) 作 Bālāvatāra; Sāgara (or Gunasāgara) 作 Mukhamattasāra; Moggallāna 作 Moggallānabyākaraṇa;

Buddhappiya (or Dīpankara) 作 Rūpasiddhi; Subhūta Candana 作 Linggathavivaraṇa; Nāṇavāliśa 作 Saṅkhyāpākāśaka; Saddhammasiri 作 Saddhathabhedacintā; Saddhammapāla 作 Saddavutti; Saṅgharakkhita 作 Sambandhacintā 等である。⁽²³⁾ これら以外にも、ティーカーという名称を持たなくても実質的にそれと同様の註釈書を有する文法関係書、更には註釈書が全くなくとも、内容的に同類と見られる文献はまだ多く存するであろう。

(3) 詩論書——或る種のバーリ詩の作品、あるいは詩論の書にもティーカーと名のつく註釈書が作られた。例えば Kāyaviratīgāthā; Jīṇāṅkārā; Saṅgharakkhita 作 Vuttodaya, 同く Subodhāṅkāra 等がそうである。⁽²⁴⁾

(4) その他の文献で「ティーカー」のあるものは次の様なものである。先づ Buddhādatta 作 Uṭtaravinicaya⁽²⁵⁾ 同く Vinayavinicaya; Dhammasiri 作 Khuddasikkhā; Mahāvajira-buddhi 作 Vajirabuddhi 右の四書はつづれめ律の註解や解説をなした文献であつて、⁽²⁶⁾ 二つ挙げた Vinayasāṅghaṭṭhakaṭṭha と内容的には同類の書と考えられる。従つてこれら四書も当然、⁽²⁷⁾ に分類すべきものと思われるが、Vinayasāṅghaṭṭha が Vinayasāṅghaṭṭhakaṭṭha と表題されてビルマ版アッタカタ・シリーズ中に現実に収められているのに反し、これら四書はその様な扱いを受けていないので、今は形式的な分類

として本項において列挙しつづけることとする。次に、以下の六書もティーカーと名のつく註釈書を有する。Dhammasenāpati 作 Eṭimāsamedipika (Gv. p. 63, 73); Jaṅghadāsaka (Gv. p. 55, 80); Ñeyyāsandaṇḍi (Gv. p. 62, 72); Dantaḍhātupakaraṇa (Gv. p. 62); Bālapapodbhāna (Gv. p. 63, 73) 最後に、ティーカーと名のつく註釈書の存在のみが Gaṇḍhavaṃsa 等に知られ、かつては間違いなく存在したと考えられるその被註釈文献の名前は記録されていないという文献を三種挙げておく。Gūḍhartha (Gv. p. 63, 73); Daṇḍipakaraṇa-nagaḍḍhabhūta (Gv. p. 63, 73); Vinayalaṅkāra (Sas. p. 106)

註(バーリ文献は特記のなす限り、すべて PTS 版により、またその略号は CPD のそれによつた)

1 W. Rahula 著 Tipiṭaka, Aṭṭhakathā, Tika 等と続くバーリ文献の制作を年代的に大別しようとするが、その中で Aṭṭhakathā 制作の時代とは、Anurādhapura 時代(西紀前三世紀——西紀後一〇世紀頃)に大体相当すると述べている(W. Rahula: History of Buddhism in Ceylon, Colombo, 1956, pp. xvii-xviii)

2 例えば Sv. vol. I, p. 92, 113, 167; vol. II, p. 581. Ja. vol. II, p. 299. Vism. vol. I, p. 107; vol. II, p. 384, 450 等。但つこれらの用例で意味するアッタカタとは実際は、今日のバーリ・アッタカタではなく、その原資料たる古代シンハラ語等のそれである。

3 スリランカ版とは Simon Hewavitarne Bequest Series (SHB

版)のこと(拙稿「S. H. B. Pali Aṭṭhakathā とその」、『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第一号九一—八三頁)またビルマ版とはビルマ第六結集版のことで、タイ版とはタイ王室版のこと。詳細は拙著『国際仏教徒協会所蔵・パリー語文獻分類目録』昭和四九年、二六—三〇頁参照。

4 Milindaṭṭhā. Introd. p. xiii.

5 Suttasāṅgahatthakathā. SHB 版、Introd.

6 10の年代は Malasekera の説であるが (Pali Literature of Ceylon, Colombo, 1958 (reprinted), p.210) Rahula は彼の年代を10—11世紀とする (Rahula: op. cit. p. xxviii)

7 Malasekera: op. cit. p. 191

8 その他 Sas. (p. 115) とは Tejodipa 作の Paritaiṭṭhā という書名が見られるから、当然 Paritaiṭṭhā である文獻をいつ存在したと想像出来る。因みに Buddhaghosa はスリランカに来島する以前に、マハ・本土にならば “Paritaiṭṭhā” を制作しようとしたと伝えられている (Cl. chap. 37, v. 226; Saddhamma-s. p. 53, 54; Sas. p. 31) などというので Geiger は本書は Paritaiṭṭhā の註釈書と考え (Geiger: Cl. trs. pt. 1, p. 24, note 3) Malasekera は Paritaiṭṭhā の語を形容詞 (short, concise) と解してこれを「三蔵の簡略なる註釈書」という意味だとつづる (Malasekera: DPPN, vol. II, p. 158; op. cit. p. 81.) といつては Buddhaghosa がこの書を実際に完成させたか否かは不明である、もしその様な書があったとしても、それが右の Paritaiṭṭhā の被註釈文獻であるか否かも全く不明である。

9 10の外 Shalāyāṭṭhakathā-Mahāvamsa (MF. p. 41, 46, 47, 48) Mahāvamsaṭṭhā Aṭṭhakathā (MF. p. 126, 193, 305, 687) などの表現も見られる。

10 拙稿「Mahāvamsa Ṭīkā とその Sahassavathu」(『仏教研究』二二巻一—一五—二二〇頁)

11 本書について、拙稿「Shālavathupakarana とその」(『仏教研究』二二巻一—四三六—四三九頁) 拙稿「Shālavathupakarana の資料的特徴」(『中村元博士還暦記念論集・マハ・思想と仏教』春秋社・昭和四八年三〇九—三二二頁)

12 10の七書のチャーカ存在は Gv. p. 60, 62, 65, 70, 71, 72; Sas. p. 34, 96, 116; Saddhamm-s. p. 63.

13 10の四書のチャーカ存在は Gv. p. 60, 62, 63, 64, 65, 70, 71, 72, 73, 74, 75; Sas. p. 51, 75, 88.

14 10の四書のチャーカ存在は Gv. p. 62, 64, 65, 71, 72, 74, 75; Sas. p. 75; Saddhamm-s. p. 63.

15 10の四書のチャーカ存在は Gv. p. 61, 62, 70, 71; Sas. p. 34, 138; Saddhamm-s. p. 63.

16 10の六書のチャーカ存在は Gv. p. 55, 62, 64, 65, 72, 73, 74, 75, 80.